



現場や地方を大事にする

参議院議員 安達きよし

きよし便り

第2号

政治の本質とは？ 問い続けたこの1年



国会議員になって約1年。地方・民間出身者としての経験を大事にしつつ、新たな気持ちで日々の仕事に向き合っています。苦労はありますが、とても充実しています。ひとえに、ご支援いただいている皆さまのおかげです。あらためて、心から感謝を申し上げます。

わずか1年の間にも、未曾有の新型コロナウイルスの感染症対策をはじめ、さまざまなことがありました。感染症対策は疫病・健康問題のみならず、社会・経済の観点からも当面は予断を許しません。皆さまにおかれましても、くれぐれもご自愛

ください。

さて、昨年11月、文部科学大臣の「身の丈発言」に端を発して、大学入試の英語民間試験の導入が見送られました。「読む・聞く・話す・書く」の4技能を測ることが目的で、2017年に正式決定し、今年4月からスタートするはずでした。実施まで5か月。土壇場でのちやぶ台返しです。さらに翌12月には、国語・数学の記述式問題の導入も見送られる事態へ。いずれも突然の頓挫に振り回されたうえに、コロナという災難が襲いかかった高校生や先生のことを思うと、察するに余りありません。

この一連の失態には、いまの政治の問題が凝縮されていると思います。

まず1つ目。「(受験は)自分の身の丈に合わせずて勝負してもらえぬ」。この大臣の発言は、格差を容認するものです。「地方の貧乏人は身の程を知れってこ



とか！」など反

発が相次ぎました。教育基本法には「すべて国民は、ひとしく、その能力に応ずる教育を受ける機会を与えられなければならない」、(中略)経済的地位又は門地によって、教育上差別されない」とあります。

その機会を与えるのは誰か。教育行政を司る文部科学省であり、その最高責任者は文科大臣です。自分の本分、使命を忘れていきます。いったい誰を向いて、何のために仕事をしているのでしょうか。

そして、2つ目。白紙となった後に、文科大臣は同省職員らに「無理であれば、勇気をもって声を出してもらえれば、違う展開もあった」と述べました。報道によると「問題があることは、職員も前から分かっていた」そうです。でも、そのことを誰も言えなかった。モノが言えない、その空気を醸し出しているのは

